

■ 書評 Book Review

明快の世界―屹立した真のリアリテ  
鎌倉佐弓句集『海はラララ』沖積舎二〇一一年七月十五日刊  
二四〇〇円（税別）

ISBN978-4-8060-1666-3

Masayuki TAMURA

田村 雅之

『海はラララ』、これが集題だ。明快、とにかく明るいとい  
うのが読後の第一印象。

子めだかに大きな水がついてくる

靴音に廊下がのびる春なれや

遠山の襷こそ笑えふかぶかと

「貝と藻と星」の冒頭から秀歌はつづく。単純な光景に、  
確かな実感がひとすじ貫かれている。二句目の靴音の響き、  
廊下に斜めに射す明るい春の日差し。廊下が伸びるとい  
うシ  
ュールレアリスティックな感受で、春の喜びの気配を表象し  
ている。であるよ、という意の「なれや」の「や」の詠嘆の  
間投助詞も効いている。

星流る頭蓋のひびは罅のまま

蟹がいて渚の昼は砂まかせ

虹いずこアメリカザリガニは泥を進む

ことは宇宙のことだから、流星の前では人は自然に順うだ  
け。頭蓋に罅が入るのも、ただに順うべしという。この女流  
俳人の独特の宇宙感覚の表象なのである。

蟹を見ていれば、砂と蟹との世界のみ。渚の昼という大き  
な景の焦点はひとつ、この二つの関係に当って動かない。そ  
こを写したのがよい。

「虹いずこ」、これも大きな景を受けて、八音にも及ぶ具体  
動物名。虹に較べたら、たいそう小さな具体に目を凝らす、  
俳人得意のうたいぶりだ。

橋までは確かに夕日を握ってた

帰る燕しやもじの縁が感じている

無窮とや匙ゆるやかに湾曲し

詩神を把まえたなら離さない、という作者の才能を思わせる。  
感受性だけで句を立たせているのだ。

二句目も前句同様、燕の飛行の軌跡を描写するだけで一句を成り立たせている。「しゃもじ」という平俗な具体が、郷愁のライトヴァースなのである。

三句目は、最初に読んだとき、なぜか「無窮大の野心」を抱いた正岡子規を詠んだのかと錯覚してしまった。どこまでも続いて極まることのない無限という意の「無窮」を、匙のゆるやかな曲線に喩した、そのヒューモールがすぐれている。

ああ小鳥風にひっかかっている

ポケットがひいふうみつつ冬うらら

あこがれて雲になりしか雲白し

「ひいふうみつつ」という俗謡歌のような歌詞のあとに、「ふゆうらら」という小春日のうらかな晴れわたった季語を付置することで、音のリズム、その声調を際立たせ、輕易の前中半句から最終五音で密度の増したふくらみのある漢こ<sup>から</sup>とばを引き出してきたのだ。

わあわあとピラカンサスに赤つどう

蓑虫の蓑に入りなば出たくなし

ピラカンサスの赤という単純な景だが、そこに過剰な「わあわあ」という感動詞を付加することで、結句の「赤つどう」がいつそう生きてくる。単純さが何ともいえずよい。

つぎの句も単純だ。蓑虫の蓑の中のあたたかさを想像し、さらにはみずからが蓑に入るといふ仮想の経験を体現している。この童心のようなイノセントが句の味である。歳をふつて、この童心がなかなか持てないのだ。

夕茜まばゆいときの海はラララ

「ふるさと土佐を詠む」（夏石番矢、鎌倉佐弓共著『俳句縦横無尽』沖積舎）でも書かれていたように、著者の生家は高知県吾川郡吾川村（現仁淀町）だ。「見渡す限り一〇〇〇メートル級の山々が並ぶ中の一つ。その中腹にわずかな畑とともに、私が生まれた家はあった」とある。この作者は田舎を知っている。自然と近くなれ親しんだ記憶が、文字の原風景にあるのだ。

著者がはじめて海を経験したのは小学六年時の臨海学校だったようだ。小生も海のない県に育ったので、はじめての海

は水戸の大洗海岸の臨海学校であつた。それにしてもこの句は明るい。うらやましい限りである。

竜宮に入りそこねし海鼠かな  
落ちるまで己れを露と知らざりき  
私かしら雛罌粟かしら揺れるのは

一句目、なかなか意味深長な句の題材である。探れば古代神話も奥深くにひそんでいそうな句。ここにも鎌倉佐弓独自の世界が提示されている。

根の国に向かう途中の、黄泉平坂を明暗の暗の舞台世界とイメージするのが常なのだが、ここでは明の「竜宮」が設定されている。そこに入りそこねた「海鼠」。このとりあわせが奇妙、剽軽でリアリティがあるのだ。

二句目も哲学的な思索を暗示する名句である。

つぎの「雛罌粟」の句。虞美人草という別名を持つポピーを題材に、「私かしら」ととぼけてみせる。美人の「私かしら」と言うのだ。天性の明るさ、しかし多分この俳人の心の内は単純な明るさだけでないのだ。すべからくの間人が抱かざるをえない苦や悲や哀を、同様にこの俳人もかかえ、それらをすべて呑みこんでこの明快に到っているのである。

そうだからこそ、鎌倉佐弓の句は屹立しているのだ。句に真のリアリティがあるのだ。

以下に集の後半、○をつけた句を記してみる。

橋桁に橋重からんにわか雨

横断歩道わたしの風を待っている

書けばわずか二文字の勇気が寒い

生きめやも卵の花色の恥骨もて

どこへ行くいつ帰ってくる流星

西瓜のなかは風と地平ときのうの夕日

転がってバケツ楽しも風こぼす